

## 『詩経』の読みかた

『詩経』は、西周（紀元前一〇二七〜七七）の初期から東周（紀元前七七八〜四八二）初期に、口承で謡われていた歌を、蒐め書物の形式にしたと考えられます。「国風秦風」篇に収められている「黄鳥」と題された一篇は、紀元前六二二年秦の穆公の葬儀を謡った詩と判るので、おそらくこれが全篇中、いちばん新しい、つまり集中作の時代の下限と考えられています。

交交黄鳥 交交たり黄鳥

高麗鶯がこもごも鳴き交わし

止于棘

棘に止まる

棘の樹々に止まっている

誰従穆公

誰か穆公に従うは、

ああ 穆公の巻き添えになったのは誰だ

子車奄息

子車の奄息なり

子車奄息だよ

維此奄息

維此奄息は

あああの奄息か

百夫之特

百夫之特

あの人は誰よりも秀れた方

臨其穴

其穴に臨んで

墓穴の前に立って

惴惴其慄

惴惴として其慄る

さぞ辛かっただろう

彼蒼者天

彼蒼者天

青々とした天よ、あなたは

殲我良人

我良人を殲せり

われらの良き仲間を奪って知らぬ顔

如可贖兮

如贖可兮

あの方の代りになれるには

人百其身

人其身百にせん

凡人百人いても足りないほどだ

…と、この詩は形も整っていて、「交交黄鳥」で始まり「人百其身」で終る十二句が三回、繰り返されます。一聯目が子車でしたが、二聯目仲行、三聯目が鍼虎と殉死者の名前が入れ替わります。

『漢書』の「芸文志」のなかに「周時代の初め采詩の官、諸土の歌謡を採集し皇帝に献上す」とあり、『史記』の「孔子世家」に元は三千篇以上あったが、孔子（前五五一頃〜前四七七）が校訂三〇五篇に編集したと誌しています。「孔子刪定

説」と呼びます。

『荀子』に「風、雅、頌」の文字があるので、戦国期（前四八一〜前二二一諸子百家の時代）には現行の『詩経』が出回っていたようです。

その後、前漢（前二〇二〜一〇八）「三家詩」と名付けられる「魯、齊、韓」の三氏の註釈が現れ、それをさらに深めた「毛亨（毛公）」の註釈が登場。これが、『詩経』解釈の標準テキストとされて行きます。このテキストを「毛詩」と呼びます。

日本では、この「毛詩」がずっと読まれて来ました。

これを「古注」と呼んでいます。

宋の時代。朱熹（朱子）が「毛詩」に新しい解釈を加えます。これを「新注」と呼びますが、二つとも、『詩経』を「六経」の一つとし、儒教の聖典と扱う点では変わりありません。

前回（九月四日）、万葉集巻頭の「雄略天皇」の歌に『詩経』の影響を見ましたが、古今和歌集のふたつの「序」、「真名序」「仮名序」が、「毛詩」の毛亨が付けた「大序」を踏襲していることは、よく知られています。

また、後白河院が『梁塵秘抄』を編集しようとしたのも、『詩経』成立の伝に倣ったと考えられます。

『詩経』に出てくる言葉や伝説は日本列島のいろいろなところで、日本の〈文字文化〉全時代を通じて（とくに江戸時代までは）、生きていました。

金沢の六義園もそうです。

北斎の通称「赤富士」の原名は「凱風快晴」ですが、この「凱風」も『詩経』の詩の題名です。

と言って、北斎はあの絵で『詩経』の註釈をしようとしたわけではなさそうです。

あとで、この詩を読んでみたいと思います。

『詩経』の作品を、儒学イデオロギーから解放して、文学作品として読もうという動きが出てくるのは、二〇世紀に入ってからでした。

それから、いろいろな読みかたが登場して、それを勉強するのも楽しいものです。そんなことを、いろいろな学びながら、しばらく『詩経』の世界を彷徨ってみようと思います。